

ダメットの「つつましい意味理論」 批判とは何だったのか

Reconsidering Dummett's Critique of
'Modest Theories of Meaning'

2013/04/20 哲学会カントアーベント

山田 竹志

東京大学 大学総合教育研究センター 特任研究員

背景

- Davidson, 'Truth and Meaning' (1967)
タルスキの真理理論が意味理論に転用できると提唱
T文:「Snow is white」が真である \Leftrightarrow 雪が白い
- Dummett, 'What is a Theory of Meaning? (I)' (1975)
真理理論の転用によって得られるのは「つつましい意味理論 (modest theory of meaning)」だが、求めるべきは「徹底した意味理論 (full-blooded theory of meaning)」だとデイヴィドソンを批判
- McDowell, 'In Defense of Modesty' (1987) etc.
ダメットの議論を解説した上で、彼の要請は強すぎると批判
→賛否両論(ダメットの要請は通常の意味論から見て独特、
という点では一致)

目的と概要

- 目的:
ダメットの「つつましい意味理論」批判の前提は通常の意味論から見てそれほど特異なものではない, と示す
それが結局は反実在論の擁護につながる
- 概要:
 1. 先行研究(特にマクダウェル)へのコメント
 2. ダメットの議論に対する山田の解釈
 3. 真理条件意味論に適用

1 マクダウェルによる解釈と批判

- マクダウェルのダメツト解釈：
 - 与えられた概念に関する「徹底した」説明＝(1)その概念を持つことと同一視できるような実践的能力を, (2)命題的内容の決定要因としてのその概念の役割を前提しないような仕方で, 記述する(cf. DM, 91)
 - ある表現の意味に対する「徹底した」説明＝その表現が表す概念に関する徹底した説明
 - 要点: 命題的態度・行為に訴えずに意味理解について説明(cf. APM)
- 次の二つを比較せよ(cf. Gaifman 1996):
 - ① Xは語「red」を理解している \Leftrightarrow Xは, 「This is red」が真であるのは, 指し示された対象が赤いときかつそのときに限る, と知っている
 - ② Xは語「red」を理解している \Leftrightarrow Xは, 正常な条件の下で, 指し示された対象が赤いか否かに応じ, 「This is red」に同意ないし拒否を示す

1 マクダウェルによる解釈と批判

- マクダウェルのダメツト批判：
 - 内容を「外側から」特徴づけることは不可能ではないか？
（＝命題的態度・行為を，命題的内容を持たない行動のみに言及して説明することは不可能ではないか？）
 - 「外側から」特徴づけられた行動パターンは，(1)合理的理解可能性が損なわれており，(2)振舞いの中に完全には現れない(cf. APM)
 - 他の論者からの反論(Gaifman 1996, 金子2006)
 - ダメツトは意味理解に対して行動主義的な説明を与えなかったのではないか →時代遅れの考え
- 「徹底した意味理論」は通常の意味論からは異質な目的のために，限定された概念的リソースを用いて，通常の意味論とは全く別のことをしようとしているように見える

1 マクダウェルによる解釈と批判

- 山田の解釈(概要):
 - 表現Eの意味についての「徹底した」説明:Eの表す内容の把握に言及せずに, Eを理解することについて説明する
 - 「徹底した」説明を取る理由は説明上の循環を避けるため
- 徹底した説明の例
 - ② Xは語「red」を理解している \Leftrightarrow Xは, 正常な条件の下で, 指し示された対象が赤いが否かに応じ, 「This is red」に同意ないし拒否を示す
 - ③ Xは語「prime」を理解している \Leftrightarrow Xは, 「 n is prime」が真なのは n の表す数が1と自分自身以外では割り切れないときかつそのときに限る, と知っている

Eの表す概念そのものが従属節に入っていなければ③のタイプも「徹底的」と考えてOK →これで普通の意味論と連続的になる...多分

2 つつましい／徹底した意味理論

- 意味理論(ダメットの意味での)
 - = 言語表現の理解についての説明を与える
 - = 理解の理論(theory of understanding)
 - 例えば: 文「Snow is white」を理解しているとはどういうこと?
 - ところで: 文「Snow is white」を理解している
 - ⇒ 雪は白いとはどういうことかを把握している
- そこで形式的には...
- 表現の理解
 - = 内容の把握 + 内容と言語表現との関連付け

2 つつましい／徹底した意味理論

- つつましい意味理論
＝「内容と言語表現との関連づけ」についてのみ説明を与える
- 徹底した意味理論
＝「内容の把握」と「内容と言語表現との関連付け」の両方について説明を与える

意味理論が私の言うように理解の理論であるなら，[...]そうした意味理論は，当該の言語における各表現の意味を知るために知らねばならないことを説明する中で，同時に，その言語を用いて表現可能な概念を持つとはどういうことかをも説明せねばならない。

もちろん意味理論がすることは他にもある。[...]意味理論は，概念を当該の言語の言葉に関連づけること [...]もせねばならない。すると[...]この後者の仕事だけが意味理論固有の仕事なのだ，という考えが出てくる。[...]この制限された仕事のみを達成するものとされた意味理論のことを，つましい意味理論と呼ぶことにしよう。[...] (WTMI, 4-5; 強調山田)

赤く塗った箇所には問題アリ

2 つつましい／徹底した意味理論

- しかし、「内容の把握」は結局、その内容を表す何らかの言語表現の理解に帰着するのではないか？（「思想に対する言語の先行性（the priority of language over thought）」）
 - ① Xは語「red」を理解している⇔Xは、「This is red」が真であるのは、指し示された対象が赤いときかつそのときに限る、と知っている
 - ...と知っている⇒...とはどういうことかを把握している⇒...という内容を構成する概念を把握している
 - 従って①の右辺では、〈概念〈赤い〉の(Xによる)把握〉という概念が前提されている(=つつましい説明の一例)
 - ダメットによれば、多くの場合、pと知っていることは、正常な状況において、pを表す(おそらく母語の)文に同意するということに他ならない(それゆえpを表す文の理解を前提する)(cf. WTMI, 21など)(=思想に対する言語の先行性の一例)

2 つつましい／徹底した意味理論

- [続き]

- ① Xは語「red」を理解している \Leftrightarrow Xは、「This is red」が真であるのは、指し示された対象が赤いときかつそのときに限る、と知っている
 - Xの母語が英語 \rightarrow 概念〈赤い〉の把握は「red」の理解を前提 \rightarrow 循環
 - Xの母語が日本語 \rightarrow 概念〈赤い〉の把握は「赤い」の理解を前提 \rightarrow 翻訳関係を定めているだけ
- 要点: 思想に対する言語の先行性を認めるなら、①のようなつつましい説明は循環する

ダメットは「つつましい意味理論は翻訳マニュアルと変わらない」点を強調しているが、これはデイヴィドソンが真理理論と翻訳マニュアルの違いを強調していたため

2 つつましい／徹底した意味理論

- 戦略A: 内容の把握(=命題的態度)というものを一切前提せずに意味理解について説明を与える
 - ② Xは語「red」を理解している \Leftrightarrow Xは, 正常な条件の下で, 指し示された対象が赤いが否かに応じ, 「This is red」に同意ないし拒否を示す
- 戦略B: 説明される表現が表す内容の把握は前提せず(他の内容の把握を前提して)意味理解について説明を与える
 - ③ Xは語「prime」を理解している \Leftrightarrow Xは, 「 n is prime」が真なのは n の表す数が1と自分自身以外では割り切れないときかつそのときに限る, と知っている
- 戦略C: 「思想に対する言語の先行性」を拒否する
 - ①の右辺に現れる「Xは p と知っている」についての説明を, p の理解を前提しない形で与える(おそらく②に近い形で)

2 つつましい／徹底した意味理論

- 戦略Bは何らかの語についての話者Xの理解を前提する
 - 言語の基底的部分(他の表現の理解を前提せずに理解できる部分)では戦略A(ないし戦略C)に訴える必要あり
 - ダメットの考えに従うとどこかでタイプ②の説明に訴えざるを得ないことを指摘した, という点ではマクダウェルは正しい(「内容を外側から特徴づける」ことへの批判も当てはまる)
- しかし, タイプ②の説明の必要性は, 説明上の循環を避けるというごく一般的な理由と, 言語に基底的部分があるというごく一般的な想定から派生するものであり, 還元主義的・基礎付け主義的な動機を読み込む必要はない(もちろん, これらの「ごく一般的」な仮定に問題がないわけではない)

3 真理条件意味論への適用

- タルスキ流の真理理論

公理: 名「Tokyo」の指示対象は東京である

公理: 何かが述語「is a city」を充足するのは、そのものが都市であるときかつそのときに限る

規則: 名Aと述語Bについて、 $A*B$ が真であるのは、名Aの指示対象が述語Bを充足するときかつそのときに限る

⇒定理: 「Tokyo is a city」が真であるのは、東京が都市であるときかつそのときに限る

- デイヴィドソンの主張:

(対象言語の意味を前提しなければ、一つの対象言語に対して真理理論はいくつも作れるが)ある一定の制約を満たす真理理論であれば、それは対象言語に対する意味理論として機能する

3 真理条件意味論への適用

- もう少し具体的に言うと:

M文: Aはpということを意味する

T文: Aが真なのはpときかつそのときに限る

ある一定の制約を満たす真理理論から導出されたT文なら, M文の代わりに使ってよい

- デイヴィッドソンの言う「意味理論」は, 少なくとも一見したところ理解については何も述べていない
- しかし一般に, 「Aがpということを意味する」という主張から理解についての主張を導出できる可能性がある(WTMI, 3f):
 - ある人がAを理解している
 - ⇔その人は, Aがpということを意味すると知っている
- 意味理論の検証 = 理論が導く理解についての主張の検証

3 真理条件意味論への適用

- 真理理論から理解についての主張を導く (WTMI, Appendix除く)
(T文「Aが真なのはpときかつそのときに限る」が真理理論から導出されると仮定)
 - a. ある人が文Aを理解している
⇔その人は、Aが真なのはpときかつそのときに限ると知っている
→ タイプ①の説明なので、そのままでは循環→戦略Cが必要
 - b. ある人が文Aを理解している
⇔その人は、Aが真なのはpときかつそのときに限るということが、真理理論からどのように保証されるかを知っている
→ 真理理論の公理が表すことの知識についての説明がタイプ①となり、そのままでは循環→戦略Cが必要
 - c. ある人が言語Lを理解している
⇔その人は、Lに対する真理理論の知識として表現できる(理論的モデルが与えられる)ようなある状態にいる
→ この「ある状態」を分節化すべき(全体論批判)

3 真理条件意味論への適用

- 真相はどこに？
 - 「つつましい意味理論」についての議論がそのまま当てはまるのは (a)と(b)だが、おそらくこうした考えを取っている人はいない
 - デイヴィドソン自身は(c)
 - おそらく自然言語意味論の一般的な研究者は、個々の文の理解がどういうものであるかは既知として、そうした理解の間にどういう関係があるか、そうした理解がどう導かれるか、といったことに関心がある (及び、それらがどんなT文の知識として理論的に再現できるか)
 - これは(c)と類似の考えを前提する。すなわち：
 - d. ある人が文Aを理解している
 - ⇔その人は、Aが真なのはpときかつそのときに限るという知識として表現できる(理論的モデルを与えられる)ようなある状態にいる
 - この「ある状態」が何なのかには関心が持たれない

3 真理条件意味論への適用

- 最も重要だと思われる(d)について, ダメットは議論していないわけではないが, その議論は(c)についての議論と混じっている
- ダメットが強調すべきだったのは, (d)の考えが文の意味理解について別途説明が与えられうるということを前提しており, その説明は, 「つつましい意味理論」批判を踏まえると, タイプ②に類したものになるであろう, という点(「表出の要求」)
- この点はWTMIIで論じられたが, 「implicit knowledge」「manifestation」といった独特な概念を用いて論じられた

文献

- Davidson, D. 1967. "Truth and Meaning". Reprinted in his *Inquiries into Truth and Interpretation*, 2nd. ed. (2001), 17–42. Oxford: Oxford University Press.
- [WTMI] Dummett, M. 1975a. "What is a Theory of Meaning? (I)". Reprinted in his *The Seas of Language*, 1–33. Oxford: Oxford University Press (1993).
- . 1975b. "Frege's Distinction between Sense and Reference". Reprinted in his *Truth and Other Enigmas*, 116–44. Cambridge, Mass.: Harvard University Press (1978).
- [WTMII] ----- . 1976. "What is a Theory of Meaning? (II)". Reprinted in his *The Seas of Language*, 34–93. Oxford: Oxford University Press (1993).
- . 1978. "What do I Know when I Know a Language?". Reprinted in his *The Seas of Language*, 94–105. Oxford: Oxford University Press (1993).
- Gaifman, H. 1996. "Is 'Bottom-Up' Approach from the Theory of Meaning to Metaphysics Possible?". *Journal of Philosophy* 93(8), 373–407.
- 金子洋之. 2006. 『ダメットにたどりつくまで』. 勁草書房.
- [DM] McDowell, J. 1987. "In Defence of Modesty". Reprinted in his *Meaning, Knowledge, and Reality*, 87–107. Cambridge, Mass.: Harvard University Press (1998).
- [APM] ----- . 1997. "Another Plea for Modesty". Reprinted in his *Meaning, Knowledge, and Reality*, 108–131. Cambridge, Mass.: Harvard University Press (1998).